

【研究課題】

AH1pdm09 感染症による急死例についての解析

研究期間：2016年9月12日～2021年3月31日

研究期間中に登録されたインフルエンザ関連死亡事例は計 31 例であった。2016/17 インフルエンザシーズンは A/H1N1pdm(H1)が 2 例、A/H3N2(H3)が 8 例、2017/18 シーズンは H1 が 1 例、B 型が 4 例、2018/19 シーズンは H1 が 5 例、H3 が 7 例、2019/2020 シーズンは H1 が 4 例であった。最終年度は、SARS-CoV2 パンデミックの影響か登録事例はなかった。インフルエンザ関連死亡例では、ウイルス検出可能な部位として鼻腔、気管のぬぐい液と気管支・肺 4 か所を採取し、一部は凍結保存し、残りの組織は4%PFA で固定してもらっているが、これによりウイルスゲノムの解析が可能となった。2018/19 シーズンのインフルエンザ関連死亡 10 例で、鼻腔、気管のぬぐい液と気管支・肺 4 か所のウイルスゲノムの分布と検出量を調べたところ、H3 (5 例)は鼻腔や気管支ぬぐい液から H1(5 例)と同等かそれ以上のウイルスゲノムが検出されたが、肺の下葉末梢肺胞領域からはほとんど検出されなかった。一方 H1 は肺の両下葉からも検出された。また 2009 年以降の事例計 61 例の肺組織で ARDS の病理像(DAD)の頻度は H1 が 35 例中 13 例(37%)、H3 が 21 例中 2 例(9.5%)、B 型が 5 例中 0 例(0%)であった。以上の結果は、ウイルスの亜型により、気管支肺炎や ARDS を併発するリスクが異なることを示唆している。

詳細は論文作成準備中につき割愛する。